

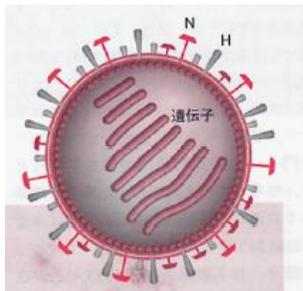
もっと知りたい食べ物のこと

冬のかぜ インフルエンザについて復習しましょう

毎年冬になるとインフルエンザが流行します。原因はインフルエンザウイルスによるものでA・B・Cなどの型があります。A型が最も症状が重く、ついでB型はやや軽度、C型はほとんど無症状に終わります。冬のかぜですが原因がインフルエンザウイルスによる場合は、かぜと診断せずにインフルエンザとします。症状もかぜとは異なり突発的に 38℃以上の発熱と強い倦怠感・悪寒・戦慄・間接痛・筋肉痛をとまいません。今では大変よく効く抗インフルエンザ薬(アマンタジン・オセルタミビル・ザナミビル)があるので、発熱後48時間以内に必ず治療を受けましょう。 インフルエンザを軽く考えてはいけません。日本でも毎年400~1400万人が罹患し、多い時には1000名以上が死亡しています。老人や乳幼児また基礎疾患を持っている人は予防に心がけ、発熱時には掛かりつけの医師に見てもらいましょう。

インフルエンザは20世紀に入り3回大流行しています

インフルエンザウイルスの構造は図1)のようになっています。1つのウイルス粒子の内部には 8本のRNAが入ったA・B型と7本のRNAが入っているC型があります。その表面にはヘムアグルチニン(H)とノイラミニダーゼ(N)という突起物があります。



この2種類の突起物の分類によりH5N1のように命名されています。インフルエンザウイルスはかなり速いスピードで表面構造を変えていく性質があり、毎年少しずつ変異するために完全なワクチンが作れません。さらに、それまでのタイプと全く異なる新型が出現する場合があります。20世紀に入ってからでは1918年のスペインかぜで4000~5000万人が死亡しています。また、1957年のアジアかぜ、1968年の香港かぜでも100万人規模の死者が確認されています。

図1) インフルエンザウイルスの模式断面

20世紀に大流行したインフルエンザについて

発生年	通称	世界での死亡数	ウイルス型
1918年	スペインかぜ	4000-5000万人	H1N1型
1957年	アジアかぜ	100万人	H2N2型
1968年	香港かぜ	75万人	H3N2型

世界はいま次のインフルエンザの大流行の瀬戸際にあります

現在世界に流行するタイプは、A/H3N2香港型とA/H1N1ソ連型とB型の三種類です。ここに鳥インフルエンザなどが変異してより人に感染しやすい人型インフルエンザが登場すると21世紀最初の世界的な大流行が発生する可能性があります。現在では1918年当時とは比べ物にならないくらい交通手段が発達し、高速化と数万倍に及ぶ大量物流が成立しています。

では、今なぜ鳥インフルエンザが警戒されるのでしょうか

1997年以前は、鳥インフルエンザが人に感染した事実は確認されていませんでした。この10年ほどの間に、ベトナムなどの東南アジアで鳥からヒトへの直接感染が何例か確認されました。わずかな例ですが2005年10月現在121名の感染と62名の死亡(約50%の死亡率)が確認されています。鳥インフルエンザによる鳥の大量死亡事例が各国で報告されていることから、ヒトへの危険がさらに中国からロシア・中近東に拡大しそうな気配です。ただし、現在の鳥インフルエンザウイルスの病原性は、鳥には高病原性ですが、ヒトには弱いものです。東南アジアの感染例は、濃厚感染が成立する特殊な条件下での現象です。写真でもわかるように東南アジアの

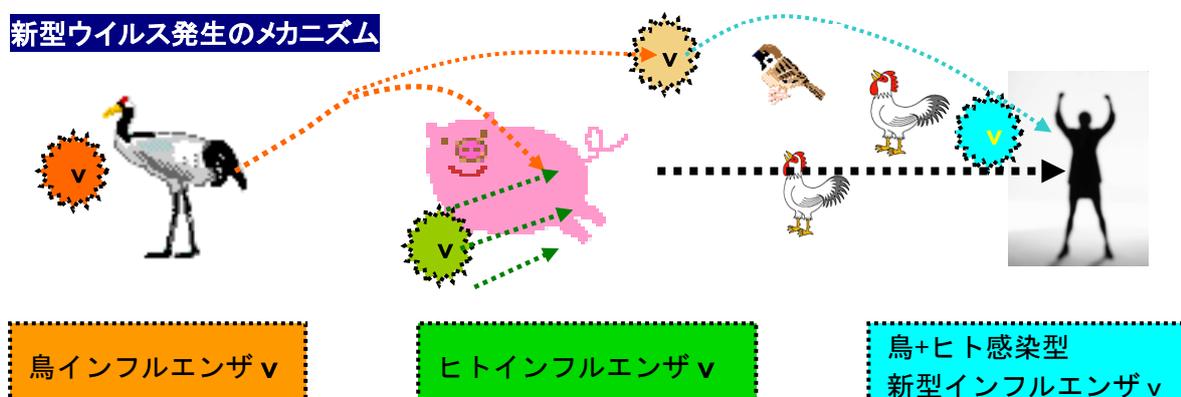
一般マーケットでは、家禽などと濃厚に触れ合うことが日常的です。このような濃厚な接触のない地域では、原発的な発生は起こらないであろうと思われることが救いです。

また、インフルエンザウイルスは、これまでの調査研究から野生の水鳥が宿主で、これら水鳥が冬に南下する際、シベリヤなど北方よりウイルスを運び、やがて野生の鳥や家禽に伝播させることがわかっています。



はじめに述べたヒトのインフルエンザウイルスも、毎年北の宿主の中で小変化を続けています。もしも、野生の鳥インフルエンザウイルスがヒトと免疫獲得の類似する豚の体内などに入り込み交雑し、ヒトに感染するタイプに変異すれば、予想も付かない大流行と死亡者を発生させる原因となります。現在の医学をしても世界全体で1,000万人以上の死者と経済混乱を引き起こすことが予測されます。こうなれば世界経済は相当期間混迷します。なんとしても避けなくてはなりません。予防手段としては、ワクチンの開発と抗ウイルス薬の確保および感染地区の隔離政策となりますが、解決すべき問題も多く時間が必要です。12月の中国での臨床例ではタミフルが効果を示さなかったとの報告も聞かれ新薬開発も叫ばれます。また、アジアからアフリカに伝播するとエイズと相乗してさらに悲惨な状況も予測されます。世界的な監視と協力が必須です。

新型ウイルス発生のメカニズム



鳥インフルエンザの予防

- 1) 鳥インフルエンザウイルスは、70°C以上加熱すると活性力を失います。鶏肉や玉子に付着していても加熱すればヒトに感染を起こすことはありません。(FAO ホームページ)
- 2) 家禽や鳥インフルエンザで死亡した野鳥などの取り扱いは専門家に任せること。やむなく取り扱う場合には、ゴーグル・手袋・マスクを着用する。
- 3) 発生地には原則として出向かないこと、アジアへの渡航時はインフルエンザワクチンを接種すること。帰国時に発熱がある場合には必ず申告し検疫検査を受けること。
- 4) インフルエンザは飛沫感染によるので、帰宅後の手洗い・うがいも習慣付けること。
- 5) 鶏舎をでる時には着替え・履替をする。特に鶏糞が付着したものは外に持ち出さず煮沸消毒する。

更に詳しい関連情報は以下のウェブサイトよりご確認ください。

国立感染研究所・感染症情報センター・WHO・FAO・CDC

検体検査・食品衛生に関するお問い合わせは 株式会社Food・Safetyに
お問合せ先 電話 090-2235-9012 hy_food-safety@kxf.biglobe.ne.jp